泣くもんか

疎開学童たちの記録

島田 雅 編

泣くもんか

疎開学童たちの記録

島田 雅 編

サンケイ新聞社

編者略歴

明治44年新潟県生まれ。昭和5年東京府立青山師範学校卒業。都内荒川区大門小を経て文京区林町小学校訓導。このとき鳴子分教場主任として疎開地勤務。その後，真砂小，明化小教頭を経て現在，北区立西ケ原小学校長。日本数学教育会幹事，東京都算数教育研究会常任理事。

検印省略

泣くもんか
——疎開学童たちの記録

島田雅編

定価 550円

発行 昭和44年8月10日

発行者 田村彬
印刷 株式会社堀内印刷所
製本 株式会社昇栄社
発行所 サンケイ新聞社出版局
東京・中央区江戸橋一の七(103)
大阪・北区梅田町二七(530)

© Printed in Japan 落丁・乱丁本はおとりかえします。

はじめに

私は、かねがね自分が体験した学童集団疎開の記録を整理し、まとめておきたいと思っておりました。集団疎開という事態は、期間からいって一年余の短年月ですが、日本の初等教育史の中の一つの大きな断層になっております。しかも再び繰り返してはならない断層なのです。私たちが経験したこの一年余の生活が、日本の初等教育史上で最初であり、最後の体験であるならば、私たち関係者は記録としてしっかりまとめておく義務があるとさえ思っております。

集団疎開した学童は、全国で約四十万といわれています。当時の疎開学童もすでに大部分が父となり母となって、自分が疎開した時と同じ年ごろの子どもをもっています。

自分たちがなめたあの疎開の生活は、自分たちでもうたくさん、再びわが子にさせたくないという願いはどなたも同じだと思います。

しかし、いまのわが子のおかれた生活環境、わが子の生活やその態度について、疎開時代のわが身とくらべてなにか考えさせられることが多いのではないかと思います。疎開当時の生活や考え方や生活環境などを〝父の歴史〟〝母の歴史〟として残し語りつぎたいという願いのあることも、その気持も私にはよくわかる気がいたします。

私が集団疎開したのは、宮城県鳴子温泉でした。ここに東京・小石川区内十三校、四千余の学童が疎開いたしました。集団疎開の規模としては、全国一だったのです。このかつての学童たちが鳴子会という組織をつくっております。いわば同期の桜という感情からです。相通ずるものがあるからです。

この人たちの中から、自然発生的に記録をまとめてみたいという希望が出ました。

多くの者は、この生活体験を記録したものをすでに失っております。当時の記憶もだんだんうすれていっております。しかしいろいろ苦心して多くの貴重な資料を集めることができました。

どの資料も、紙の色はあせ、黒ずんでしまっています。えんぴつでこまかく書かれた手紙などは、かすれて判読に骨が折れたくらいです。

私は、資料をまとめる責任者として、まとめ方をどうすればよいかをずいぶん考えました。ひとつひとつが血のにじむような、そしてかけがえのない資料です。それに、こうした資料をまとめる仕事は、四分の一世紀たった今日、これが最後のものであるような気もいたします。いきおい慎重にならざるを得ません。

私は、次のような方針でまとめることにいたしました。

最初に、当時苦労した関係者——宿舎の人——の回想といった形で、集団疎開の全貌をとらえながら、疎開から何を得たか、その当時の心情、疎開の背後にあったようなことを写す事にいたしました。これは回想した人の色あいが当然ついてまいります。梅原竜三郎画伯の画かれた浅間山は、本当の浅間山とはちがうかも知れません。しかし浅間の真髄は見事にとらえています。意は十分つくせないかも知れませんが、こんな気持でまとめる事にしました。

次に集めた当時の資料をもとにして、いろいろな部面から、疎開生活を写し出す事にいたしました。このところがこの本の主眼になるのです。この部面を記録として残したかったのです。ですから、資料と資料をつなげる、私が書いた補説の部分を除けば、当時の生の資料そのものなのです。

最後に、当時の疎開学童の保健面の指導にあたられた、東北大学医学部附属鳴子分院長の杉山尚教

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

授の思い出をのせさせていただきました。教授がまとめられた「鳴子地区集団疎開学童の衛生状態」という学術報告書は、集団疎開学童の保健面についてまとめられた、日本で唯一の貴重な学術資料でぜひ全文を集録したかったのですが、諸般の事情で果たせませんでした。しかし教授が記された短い思い出の中に、学童集団疎開のつきつめた真の姿が出ているのです。

この記録をまとめるといった仕事の口火を切ったのは、当時四年生の愛くるしい学童で、いまは高校で音楽を教えていらっしゃる島可余子さんです。

当時の先生、学童、現地の方々から、大へんなご協力をいただきました。この方々のお名前はあと書きのところに記させていただく事にいたします。

疎開当時関係した十三校の現地主任のうち最若年であった私が、この記録をまとめる責任者になってしまいました。先輩の先生方おゆるしいただきたいと存じます。

昭和四十四年七月

島田　雅

（当時林町国民学校鳴子分教場主任）

もくじ

I　回　想　9

ある教師の回想
ある学童の回想
ある母親の回想
ある地元作業員の回想

II　僕らは疎開する　41

疎開の詩
極秘の通達
多忙な準備
少年たちの戦場へ

鳴子温泉郷
鳴子の印象
鳴子の子になる
さびしい東京
鳴子地区の学寮

Ⅲ　学童歳時記

学童疎開歳時記
温泉神社祭礼
運動会と飛行機大会
川原あそび
栗ひろい・きのこがり
いなごとり
道芝採集
薬草採集
薪運び、炭運び
鳴子の正月
スキーとそり

里にうつりて
六年生帰京
わらびとり
荒雄河原の達引

Ⅳ　晴耕雨読

鳴子の分教場
日　課
滅敵必勝教育月次目標
演芸会
お風呂
シラミ頭
不平と不満
盗　み
晴耕雨読
学童の家財道具
家庭との連絡

V 満たされざるもの 195
郷愁
便り
面会
清子さんの気持
身体の糧
炉ばたの火
VI 八月十五日 241
鳴子にも戦火が
八月十五日
米兵来鳴
さようなら
またあう日まで
VII 疎開を支えた人々 273
疎開を支えたもの

東北健児（父親その一）
本を読むことだ（父親その二）
元気で頑張れよ（父親その三）
礼ちゃん、義ちゃんへ（母親その一）
カタサセ、スソサセ（母親その二）
夜着はなおしてもらえましたか（父親その四）
四人の先生（師その一）
お父さん先生（師その二）
人間はある瞬間に飛躍する（師その三）
ある宿舎主夫妻（地元その一）
縁の下の力持ち（地元その二）
トメ小母さん（地元その三）
申しわけない事
最後に
Ⅷ　鳴子地区集団疎開学童　保健状況報告書　311
あとがき　316

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

I 回想

ある教師の回想

昭和十九年七月の下旬、私は学童集団疎開学寮の主任として、疎開地に赴くことを命ぜられた。私は、この時三十二歳、まだ独身であった。私の勤務校にはもっと年配の有能な同僚が他に何人もいらっしゃったが、いずれも扶養すべき家族を持っておられる。その点、私は身軽であった。私は、こころよくこの命に従い、予測されぬ困難にぶつかっていく決心をしたのである。

引率していく学童は、三年生から六年生までの男女約百七十余名である。同行するものは、私より二、三歳若い三名の優れた男教員、児童教育には全然未経験の七名の寮母、それと現場の経験のない若い衛生婦であった。その一連隊のキャップとして現地に赴くことになったのである。

私は集団疎開に出発する日の前日、髪を切って丸刈頭にした。そしてリュックサックの中に、自分の手で謹書した教育勅語と、昭和十六年十二月八日に渙発された宣戦の大詔の写しを入れていた。疎開地の学寮で校長にかわって奉読するためである。

丸刈頭にした翌日から、集団疎開の生活が開始された。昭和十九年八月十三日である。

私の学寮の集団疎開生活は、四百二十九日続いたのであった。夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎ、春を迎え、夏を迎え、また秋になったのである。

しかし私は、四百二十九日間、疎開地に勤務していたのではない。戦争が苛烈になり、本土空襲の

しげくなった昭和二十年五月初旬、東京の本校勤務を命ぜられたのである。ひとり者の身軽さからであろう。家は空襲により全焼していたので学校の宿直室に泊り、あとの学校周辺の大空襲を二回も体験したのであった。

私は七月二十四日、召集令状を受け取った。入隊は八月十四日であった。出征する前に、疎開地を尋ねて見たくなった。同じ屋根の下で生活を共にした学童たちに別れを告げ、美しい山野をもう一度見てから心残りなく出征したかったからである。

召集令状を受け取ってから数日後、やっと疎開地を尋ねた。宿舎のたたずまいや、緑の山河の景色は変らなかったが、私は学童たちを見たとき、本当に息がつまる思いがしたのである。いまでもまざまざと学童たちの姿が眼に浮かぶ。ユウレイが、足のあるユウレイが出迎えに出た！　とこんな思いなのである。やせて、顔だけが青白くむくんで、元気がなくて——。

私が東京にもどらずに、ずっと学童たちと接していたら、案外、気がつかない状態だったかもしれない。二か月ほど離れて、久しぶりに訪問したときの学童たちの印象は、まさしくユウレイの姿であったのである。

防空頭巾姿で鳴子駅到着

後日、その当時の資料を調べてみると、やっぱりいろいろ思いあたることが出る。食糧事情がぐっときゅうくつになり、ただでさえ少ない主食の配給すら、減配されている。それに反比例して、除草の手伝いとか、河原の開墾、松根油とりなどの勤労作業が増してきているのである。学童も教師も寮母も疲れはてていたのである。

学寮日誌にも「児童生気なし、原因何処にありや不明なるも、食物と家庭的愛情の欠乏によるところ、大なりと思惟される」と記されている。空腹でやせおとろえながらも、父や母のやさしい言葉を久しく聞かなくても、みんな歯を食いしばって、日本の勝利の日までとがまんをしていたのである。

疎開地を離れる前夜、同僚たちが、私の武運長久を祈って別離の宴をもうけてくれた。当時の学寮日誌に次のように記されている。

「一人四合の酒配給あり、島田主任を送る会を開く、鳴子集団疎開に関して大いに意見を戦わす、食糧問題その他を中心として」

どんな話をし、どんな点で意見を戦わしたかは記憶にない。おそらく食糧事情に対する不満、学童たちの健康状態と勤労作業などの関連について、タカ派とハト派の意見に分かれ討論しあったのだろう。それに、本当に久しぶりの配給の酒の勢いも手伝ったからであろう。

私は、予定通り八月十四日に入隊した。そして翌八月十五日、軍装をととのえた姿で、終戦の玉音を聞いたのである。

私は、疎開当時の記録をいろいろ取った。学童の月々の体重の増減から、食事の献立て、学童たちの手紙の写し、日課など、いま見るとどれひとつ思い出のタネにならないものはない。しかしもっと

丹念に記録しておけばよかったと思っている。

「シラミ」という名前はよく知っているが、ホンモノにお目にかかりホンモノと血肉をわけ合ったのは、集団疎開地なのである。集団疎開というと、すぐシラミと続くくらい疎開とシラミは切れない縁がある。シラミは私たちのところだけでなく、全国の集団疎開地で悩まされた現象である。

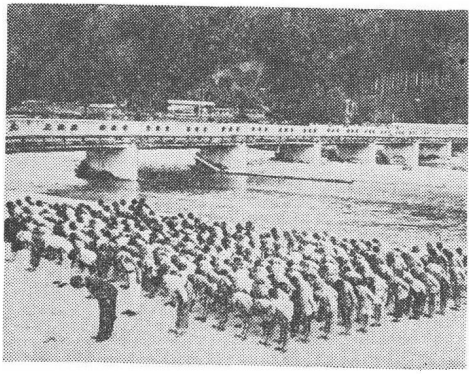
シラミはあっという間にふえる。シラミと気がついた時には、疎開地の場合、もう処置なしであった。シラミはとるよりふえる方が早いのである。

私はシラミの習性や生態をもっと研究しておけばよかったと本気に思っている。材料には事欠かない。研究テーマも考えればいくらもある。博士論文でも書けたのにといまさらくやんでいるのである。なぜならば、私の資料にはシラミ駆除に頭を悩ましたことの記録はあるが、シラミ自体については何の記録も残っていないからである。

学童たちは、いろいろな生活の知恵を働かした。せっぱつまった時には、子供でも決して大人に負けない知恵を生み出す。生きるためには弱肉強食の絵図なども生み出した。学童たちからも回想がよせられることになっているが、私はその仕事をする連中に一つの注文をつけたのである。腹がへったとか、シラミがたかったとか、手紙が待遠しかったとかいう回想はなくてもよい。それはこのあと本文に綴られる当時の生の資料の方に、実感のこもったのがたくさんあるからである。あなた方からほしい回想は、当時の学童たちがどん底のおいつめられた時点でどんな生活の知恵——教師などの眼を盗んだ悪知恵かも知れぬ——を働かしたか、また日記や手紙などに書けなかった生活の現実をかくさず書いて

ほしいという注文である。「今だから話せる」または「真相はこうだ」といった回想を望んだのである。

この書には回想（地元からよせられた疎開学童今昔話も回想である）の章と、文をつなげるための言葉や補説以外は、全部二十五年前の生の記録そのままを用いている。しかし、学童たちのその立場に立っての回想がないと集団疎開の全貌をつかむには片手落ちと思うのである。回想というものは、よいものはよりよく、悪いものはより悪くなされるのが普通らしいが、どんなことが書かれるか期待もするし、空おそろしい気もするのである。私がこうして学童たちの回想にある枠をはめてしまうと、書き残されてしまうものがひとつあるように思われる。学童たちを支えた自然の影響についてである。これが書き残されると思うのである。



毎朝の日課・宮城遙拝

学童たちの大部分は、東京育ちであって、農山村の四季をずっと通して味わった経験がないのである。春・夏・秋・冬の自然の微妙な変化の色あい、その中の楽しさは、人間たちの血みどろな争いに関係なくおとずれてくる。鳴子の自然は、学童たちに強い印象を残したのであった。苦しみや悲しみは歳月がこれを流し去り、忘れ去らせてくれる。あとに残ったものは思い出の甘い感傷と、疎開地鳴子の美しい風物なのである。それが鳴子が「私の心のふるさと」とか「私の第二の故郷」という表現になって表われてくる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.